

「終わらない旅をしよう」

マタイによる福音書 8:18-22

2025年10月12日
野村 友美 師

<人生という旅をする>

皆さんは、旅はお好きですか？

私はわりと好きな方で、特に初めての場所に行くのは嬉しくてワクワクします。ひと言で「旅」と言っても、日帰り旅行から何週間、何ヶ月、あるいは何年もかかる長い旅まで、旅にもいろいろあるでしょう。

自分が暮らしているところを離れて、どこかしら違うところへ向かって行くことを、私たちは「旅」と呼んでいます。とは言っても、家からスーパーまで行って、買い物して帰ってくるのは多分「旅」じゃありませんよね。広島駅まで出て新しい駅ビルを見てくるのは、人によっては「旅」かもしれません。

住み慣れた家を離れて、日常を離れて、いつもの枠組みを離れて、そこでしか出会えない誰かや何かに出会おうとして、私たちは旅をします。そして旅には、だいたいハプニングが付きものです。

旅の途中で何か思いがけないことが起きたり、知らなかったことを経験したり、知っているとっていたものを改めて見直すこともあるでしょう。最初から最後まで、すべてが計画どおりに進む旅は、ほとんどないと思います。その旅が長ければ長いほど、目的地が遠ければ遠いほど、予想外のあれこれに出会う確率は高くなるはずです。

「人生の旅路」と言われるように、私たちの人生はよくこの旅に例えられます。ずっと同じ状態の

ままではいられなくて、自分自身も周りの環境も絶えず動き続け、変わり続ける。人生とは確かに、ひとつの場所に長く留まらない、終わりのない旅のようです。

何年も、何十年もかかる長い旅には、予想外の出来事が山盛りでしょう。計画どおりには進まないし、足止めや回り道が何回もあるし、嬉しいことにもそうじゃないことにもたくさん出会う旅になると思います。何か起きるか、どこを通るか、どんなことに会えるかわからない。そんな旅を一緒にしよう、とイエス様は私たちに手を差し出しておられます。

「わたしに従いなさい。」

そう言って、イエス様はその旅がどういう旅なのかを、今日の聖書の言葉で説明しておられるんです。

<従うということ>

ガリラヤ湖のほとりの町カファルナウムで、イエス様は集まってきた大勢の人の病気を癒して、悪霊を追い出されました。噂はますます広がって、イエス様のところには次から次へと人が押し寄せます。イエス様に癒してもらいたい人たちや、イエス様がどんな人かを確かめたい人たち、そしてイエス様が革命を起こしてくれると期待する人たち。いろんな思惑を抱えた人々の集団を見て、イエス様はご自分の弟子たちに、ガリラヤ湖の向こう岸へ行くようにとお命じになりました。

そんなにたくさんの方が集まってきたんですから、みんなまとめて弟子にしてしまえばいいのにとおもうところですが、イエス様の考えは違ったようです。自分が癒されることや、

自分を満足させてくれること、自分の期待に応えてくれることを求めてやって来た人々から、イエス様は明らかに距離を取ろうとしておられます。

弟子たちが舟を準備している間に、一人の律法学者がイエス様に近づいて話しかけました。

「先生、わたしはあなたが行かれるところなら、どこへでも従っていきますよ！」ずいぶんと情熱的な人ですね。この律法学者はきっとイエス様の教えと癒しに感動して、もっとイエス様のそばで味わいたいと思ったんでしょう。律法学者は聖書の専門家ですから、自分の学びの役に立つとも思ったのかもしれません。どこへでも従っていきます！と熱烈に宣言したこの律法学者に、でもイエス様は「よし、おいで！」とは言われませんでした。代わりに、その熱烈さをクールダウンさせるような答えを返します。

「狐に穴があり、空の鳥には巣がある。

だが、人の子には枕する所もない。」

動物や鳥にだって帰って休む場所があるけれど、わたしにはそんな場所はない。わたしに従うということは、好きな時に自分の場所に戻って、行きたくなったら また出発するとはいかない、ずっと進み続ける旅なんだよ。それでも付いてくるか？

このイエス様の問いかけに、この律法学者がどう返事をしたのかはわかりません。何も言わないままで、彼はこの場面から姿を消しています。どこへでも従っていきますよ！と張り切っていたこの律法学者は、もしかしたらずっとイエス様と一緒に旅を続ける気はなかったのかもしれません。

十分に味わって満足できたら、とりあえず自分の場所に帰って、また行きたくなったらイエス様

のところに出かけていこう。そんなつもりでいたんじゃないかと思います。

この律法学者とイエス様のやりとりを、横から聞いていたんでしょうか。続けて一人の弟子が、イエス様にこんな申し出をしました。

「主よ、まず、父を葬りに行かせてください。」

イエス様、あなたについて行かないとは言いませんよ。でもその前にまず、父親の葬儀をするためにいったん帰らせてください。

この弟子が言っていることは、別に自分勝手でも何でもない、当たり前のことに思えます。「それは当然だよ、かまわないから今すぐ自分の家に帰りなさい」とイエス様が言うてくれるのを、この弟子も期待していたんでしょう。なのにイエス様の返事はびっくりするぐらい厳しくて、薄情にさえ聞こえるものでした。

「わたしに従いなさい。

死んでいる者たちに、

自分たちの死者を葬らせなさい。」

イエス様はいったいどういうつもりで、こんなことをおっしゃったんでしょうか。

本気で従うつもりなんだったら、親の葬儀も無視してついて来なさい、とイエス様は言うておられるんでしょうか。「死んでいる者たち」って、いったい誰のことなんんでしょうか。

引っかかることがいっぱいですが、そもそもこの弟子の言い分にも、考えてみたらちょっとおかしいところがあります。

「父を葬りに行かせてください」というこの弟子の父親は、今いったいどういう状態なん

でしょうか。

もし父親が亡くなったばかりで、これから葬儀をするところだったとしたら。まだ生きていたとしても、自分の父親が今にも死んでしまいそうな状況だったら。この弟子は、こんなところには居なかったでしょう。

自分の父親が死んでしまったか、死にかけているところだというのに、のんきにイエス様を囲んでいる場合じゃありませんよね。どうやら彼の父親は、少なくとも今すぐに葬儀の心配をしないとイケないような状況ではなさそうです。

じゃあどうしてこの弟子はわざわざ、「まず、父を葬りに行かせてください」なんていう願いをイエス様にしたんでしょうか。

きっと彼はこのままイエス様と旅するのが不安になって、何が何でも自分の場所に戻りたくなったんだろうと思います。現代日本で生きる私たちにとっても、家族の葬儀は仕事や日常生活の全部をいったん中断するぐらいの、最優先と言ってもいい出来事です。それは古代のイスラエルでも同じでした。

親、特に家長である父親の葬儀は、他のどんなことよりも優先されるべき大事な義務とされていました。ですから「父親の葬儀」は当時の人々にとって、どんなことでも断れる最強の理由になったんです。つまりこの弟子は、誰もが「じゃあ仕方ないね」と言うしかない理由を盾にして、イエス様との旅を延期しようとしたわけです。このままイエス様に従っていくんじゃなくて、まずは自分の場所に戻って、心の準備とか 旅の装備とか、何があっても安心できる体勢を整えておきたい。

まだやっておきたいことや気になることがあるから、先にそっちを済ませたい。そういうあれやこ

れやを全部済ませて、準備が整ったと思えたら、自分が納得できるタイミングであなたに従いますね。そんな風に、この弟子はイエス様に提案しようとしているんです。

<終わらない旅をしよう>

この弟子の思惑が、イエス様にも伝わったんでしょう。

だからこそイエス様はびっくりするほど厳しい言葉を使って、この弟子の提案を一撃で打ち砕いてみせました。

準備とか安心とか自分のタイミングとか、そんなものは置いておいて、今すぐわたしに従ってきなさい。

きっぱりとそう言って、イエス様はこの弟子をご自分との旅に招いておられるんです。

「死んでいる者たちに、
自分たちの死者を葬らせなさい。」

厳しくて冷たく聞こえるこの言葉は、死から命に向かう旅立ちへと弟子を押し出す言葉だと言っていいでしょう。

イエス様の旅が目指すものは、天の国の命です。すべてのものに命を与え、すべてのものを養っておられる神様の支配の下で、すべてのものが神様の愛と正しさによって治められる、天の国を生きる命。限りある地上での命と、その命を超えた先でも、神様と共に生き続ける命。この天の国の命を生きることが、イエス様との旅そのものなんです。

だからイエス様が言う「死んでいる者たち」も「死者」も、きっと他の誰かじゃありません。

天の国の命を生きる旅から引き返そうとささやく、この弟子自身の誘惑の声です。

命から死へとあなたを誘うその声を葬って、わたしに従ってきなさい。そう呼びかけて、神様の愛と正しさに治められて生きる人生の旅に、イエス様は招いておられるんです。

ここで招かれているのは、この弟子だけじゃありません。今日の言葉を聞く一人一人が、「わたしに従ってきなさい」とイエス様から招かれています。

人が人を支配して、好き勝手に利用して、弱い立場に置かれた人の命や尊厳が無視されて、踏みにじられることが当たり前になってしまっている。そんな現状に留まって、自分の安全だけを必死に守ろうとするんじゃなくて、一緒に天の国を目指す旅をしよう、とイエス様は招いておられます。

自分たちの罪が生み出す暗闇に引きこもって、天の国の命から目を背けて、死んでいる者のように生きるのはもうやめなさい。そうイエス様は呼びかけて、弟子たちに、私たち一人ひとりに向かって、招きの手を差し出しておられるんです。

私たちが招かれているこの旅は、一生をかけて進み続ける旅です。

イエス様について行く感動を味わって、満足できたらとりあえず自分の場所に帰って、また行きなくなったらイエス様と合流しよう。

そんな風に、行ったり戻ったりできる旅じゃありません。私たちが感動して満足する時も、疲れてぐったりする時も、つまずいて倒れる時も、イエス様が一歩ずつ導いてくださって、ずっと一緒に歩き続けていく旅です。私たちが招かれているこの旅は、招かれたその日が出発の時です。

自分のやりたいことを済ませて、準備がしつか

り整ってから、自分のタイミングでイエス様について行こう。

そんな風に、後回しにできる旅じゃありません。

神様の愛から目を背けて、天の国の命を諦めるようにと誘う、私たち自身の罪の声を

振り払うために、イエス様に引っ張っていただいて始まる旅です。

計画どおりには進まないでしょうし、足止めや回り道がきつと何回もあって、嬉しいことにもそうじゃないことにも、たくさん出会わされるでしょう。

それでも、いつだってイエス様が一緒に歩いてくださって、私たちの足元を神様の愛と正しさに照らして、天の国の命へと導いていける旅です。

そして一緒にイエス様に従う弟子たち、天の国を生きる仲間たちと、励まし合って祈り合って歩いていく旅です。

先に歩いた信仰の先輩たちの足跡を踏みしめながら、後に続く人たちのために道を作っていく旅でもあるでしょう。

一生かかる、いえ、私たちの人生のさらに先まで続いていく、終わらない旅へ。

私たちはイエス様と一緒に踏み出していきましょう。どんな道を通るときにも、イエス様の手が私たちを支えていてくださいます。

お祈りいたしましょう。